

# 教務だより

2016年10月号  
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

## 「一念、岩をも通す」ということ。

茗溪塾塾長 宇野雅春

毎年この時期の教務便りは「一念岩をも通す」です。説明会でも例を挙げて話すとなんとなく親御さんの目がきらりと光るような気がします。よし、あきらめず頑張ろう！

実際、説明会の感想にもそういうものが時々あります。

ただし、「一念」は親の「一念」ではなく、あくまで生徒自身の心の中に芽生えた一念でなければなりません。確かに親の「一念」も大切ではあります。なぜなら、親がどうしてもいのに子供が必死というのはなかなかないと思うからです。親の気持ちと子供の気持ちのどちらが先か？という問題も重要です。親の気持ちがいずれは子供を動かす原動力になるはずですし、子供がふと行きたい学校を考えたとしても、それを持続し実現するには親の気持ちも大きく作用すると思うからです。この相乗効果が生まれないと受験での成功は困難を極めます。親の「一念」がやたら先行しているというのは、子供にとっては重荷以外の何物でもありません。「見てごらん下さい。こんなに頑張っていて偏差値を10も上げて、見事第一志望に受かったんだって！」なんて言われた時の子供の気持ちを考えてみると、やる気になるというよりは多少むかつくはずで、「それなりに頑張っている」と子供は思っていますから、一回は聞き逃したとしても、2回3回と言われていけば「ああ、そうですよ！私はどうせ、できませんよ！」と、とても投げやりな気持ちになるはず…。

子供の力を信じるからこそその激励だったら、効果が出ることもあるのですが、心で思っていることは態度には出てしまいます。逆に、成績を見て子供が受験したいといっているのを「無理」と決めつけるのも間違っています。「そんなに無理しなくていいのよ」と先に言われてしまうのも、子供にとっては悔しいものです。どっちにしたって親に言われるのは、子供にとっては不愉快なのですが、子供はやはり子供。あとで後悔することは目に見えています。どうしても大人の関わりが必要です。全く放置されることが子供の本意ではありません。塾や学校の役割もその点ではとても大切だと思います。十分に親と子の意向を理解して、受験をやり遂げる必要があります。受験が終了後に「親に喜んでもらえなかった」は相当なダメージになります。

とどのつまり、子供の「一念」をどう作るかが重要ということ…。条件を上げてみると、

- ① 子供が自分の将来を思い描ける「受験」になっていること
- ② 家庭の中に、その理解があること（協力や援助）親が過剰に先行しないこと。
- ③ 条件が整えられていること。時間的なことや子供の現状や努力目標がより深く周りに理解されていること…勉強の場が保証されていること。

子供一人一人が置かれている状況はみな違いますが、受験に限ってのこの条件作りが「一念」を作り、輝かしい「合格」を生み出すのだと思います。この秋からの塾の役割としても、そこは大切な部分だと思います。